

令和元年6月7日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04710

研究課題名(和文)「単元を貫く言語活動」を支える言語観と授業づくりに関する研究

研究課題名(英文) Research on the Concept of Language and the Creation of Classes to Support 'Language Activities to Stick to the Unit'

研究代表者

渡辺 哲男 (WATANABE, Tetsuo)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：40440086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：教室において、ゴールをあらかじめ定めて、それに向かって議論する言語活動は、結局教師が想定した方向にまとまっていかざるを得ない。本研究は、こうした言語活動に対する見方に対する異議申し立てを行った。私たちは、「言語活動」と、広い意味での「アート」を接続することで、従来にはない言語活動の捉え方を獲得することができた。具体的には、詩的な言葉、演じることと哲学対話、アートについて語る教師の苦闘、絵画を描く活動と言語活動の関係に関する検討などを行った。また、AI時代における言葉と教育のあり方についても考察を行った。そして、これらの研究をまとめた書籍を、2019年4月に刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、「主体的・探究的な学び」が重視され、教室における学習者の協働による学習の方法が模索されている。しかしながら、単に学習者の表現活動や話し合い活動を増加させることをもって「主体的、探究的」と捉える実践も少なくない。言語活動を「アート」と結んで理論的、実践的考察を行うと、わかりやすく、まとめることを前提とするのではなく、ある意味で、一方的な、モノローグの連発と、そのモノローグを受容する他者の関係性が、実験的思考を導くという知見を得ることができた。このように、対話活動を重視する実践に欠落していた、こういった言葉が対話を深めるのかという問題に、本研究は一定の貢献を果たしたと言える。

研究成果の概要(英文)：In the classroom, language activities, in which students set goals in advance and discuss them in the face of those goals, have to be organized in the direction that teachers expect. The study challenged this view of language activity. By connecting linguistic activities with "Art" in a broad sense, we were able to gain a new understanding of linguistic activities. Specifically, we examined poetic language, the interaction between acting and philosophy, the struggles of teachers talking about art, and the relationship between painting and linguistic activities. We also considered the way of language and education in the AI era. We published a book summarizing these studies in April 2019.

研究分野：国語科教育、教育思想史

キーワード：言語活動 中動態 アート 詩的な言葉 絵画 演劇 哲学対話

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「言語活動の充実」が現行学習指導要領のキー概念となって数年が経過し、「充実」の意味内実が、単に、話し合いや文章を書く場面を増やすことであると誤解されている現状が存在した。これに対する危機感として、国語科で「単元を貫く言語活動」を導入した授業が提唱され、多くの授業づくりのノウハウを示す書籍が出版されるに至った。これらの書籍では、自由に何かを表現すれば「充実」したことになるという誤解を正し、単元の指導目標に沿うような「言語活動」を継続的に行うよう、授業づくりをするべきであると論じられている。

このような動向は、教師による学習者への一方的な教え込みを打開しようというものであるが、次のような問題が存在するように思われる。

- (1) 現場の教師が、「単元を貫く」ということの意味内実を理解していない。そのため、毎回の授業でただ「言語活動」を組み込む授業の指導案を作成してしまっている場合がある。
- (2) 「単元を貫く言語活動」を唱導する一人である水戸部修治の著作に多く示されているのが、単元中の並行読書による、継続的な「言語活動」である。しかし、「単元を貫く」ために並行読書をするという意味が正確に伝わっていない。そのため、教材文を読んだ後で同ジャンルの本を読ませるなどという誤解を生み易い。
- (3) アメリカ・アレナスによって広まった、美術の「鑑賞教育」(『みる・かんがえる・はなす』淡交社、2001 など)にも重なる問題であるが、学習者同士の対話で思考が深まることについて、現時点では学習者同士の対話が行われることそれ自体の重要性の指摘に止まっている。

こうした問題を打開するには、そもそも、「単元を貫く言語活動」の実現を支える言語観を明確にする必要がある。たとえば、話し合い活動は、「合意形成」や「意見のまとめ」をめざすことが前提とされることが多い。しかし「単元を貫く」ための「言語活動」というのは、ある特定の認識にたどりつかせたり、考えを固定化したりするための営為ではない。「言語活動」とは、既存の知に問いを立て、新しい認識をひらく営為なのである。だとすれば、表現することは「まとめる」「意味づける」ことではなく、世界に働きかけをして、自分の認識に揺さぶりをかける能動的な営為なのだということがわかる。私たちは、こうした、まとめるための「言語活動」ではなく、新しい認識をひらく「言語活動」を、理論的に検討することで、学校教育における「言語活動」の意味内実が誤解されている(ことが多い)状況を打開しようと考えたのである。

2. 研究の目的

研究開始後、文科省が提起した「単元を貫く言語活動」という用語自体を、文科省自身が事実上取り上げるという事態に至った。「単元を貫く」ために、あらかじめゴールを設定して当該単元を開始すると、結果的に学習者をゴールに向かって誘導してしまうことが危惧されたからである。そして、今日「アクティブラーニング」あるいは、「主体的・探究的で深い学び」といった用語が使われるようになったのである。とはいえ、私たちの研究は「言語活動」概念に新しい知見を組み込むことを目的としているし、上記の危惧は私たちももっていたことであるので、研究開始前に掲げた以下の目的は、研究期間中変更せず維持した。

(1) 新しい認識を始動する「言語活動」をどう教育するかを明らかにする

上記の言語観を検討するためには、どのような言葉が私たちに新しい認識をもたらすのかを明らかにしなければならない。本研究では、意思伝達のための実用的言語ではなく、新しい意味を呼び起こし、他者の言語活動を喚起するような「詩的な言葉」による表現が、新たな自己認識をひらく可能性を検討する。かような「詩的な言葉」により、「こんなことを言っているのか」と発言がしづらかった子どもも、何かを表現できるようになると予測できる。そして、「詩的な言語」による表現を、いかように提示すれば、学習者が実際に自身の表現として活用できるかを明らかにする。

(2) 学習者が新しい認識をひらく「詩的な言語」の「文法」を明らかにする

体験を言語化したり、対象を言語化したりするための思考法を提示するためには、子どもにゼロから表現させるのではなく、どのようにすれば、お互いの思考を深める表現ができるかを示す必要がある。そうしないと、悪しきディベートのように、相手に勝つか負けるかに執着する恐れがある。これを乗り越えるために、「詩的な言語」の「文法」を提示するという手法を検討する。これにより、詩のように、他者が多様に解釈できる余白を残す言語がどのような「文法」をもっているのかが明らかになり、その「文法」を、学習者が公平に活用できるようになる。

(3) 上記(1)(2)をふまえた学校現場への還元

教科教育学、教育哲学、倫理学の研究者が協働で現場の授業に関与するなどして、「単元を貫く言語活動」(文科省が取り上げた後は新しい認識をひらく「言語活動」)が実現するための具体的な貢献を行う。その際、教師が、ある解釈をして教材を示したとき、学習者もそれに喚起されて新たな解釈を重ねるといふ、ミュージアム的な「解釈の共同体」が成立することを明らかにする。

3. 研究の方法

研究期間中の前半は、新しい世界認識をひらく「言語活動」の意味内実を、「詩的な言葉」を、詩人による詩作をてがかりとして考察する。詩の解釈や詩作というのは、惰性化した認識に揺さぶりをかける営為であるという見方ができるが、本研究では、こうした立場から、詩人が詩を創作する思考プロセスを検討する。これにより、体験を言語化したり、対象を表現したりするための思考法を見出すことが可能になる。その後、体験や対象を言語化するための思考法を具体的に授業実践で提示するために、「詩的言語」が生み出される「文法」を検討する。たとえば、自然の中に自分の姿を見出したり、二つの相反する言葉を対照させたりすることによって、一編の詩が生み出されることがある。こうした詩的言語を創出する営為を、特別な才能のある人の専売特許とせず、誰でも公平に使える「文法」として整理し、子どもが「言語活動」によって新しい認識が起動する道筋を示すことができる。また、こうした、「詩的言語」がコミュニケーションで用いられることによって、表現の受け手は、多様な解釈が可能な言語を「意味がわからない」と拒絶せず、新しい認識をもたらす言語として積極的に受容することも必要となる。

後半では、上記の理論研究の成果を、研究メンバーのディシプリンと統合させながら、学校現場に還元する活動を行う。たとえば、すでに国内外に広がりを見せている、思考を深める対話型授業の一つのケースとしての「子ども哲学」「哲学対話」を批判的に考察する。単に対話の形を整えれば、誰もが話を始めるわけではないし、無理に話をしなくてもよい、という受容的態度は、確かに重要ではあるが、結局何も話さなければ、新しい認識は得られないのではない。こうした問題意識に基づき、既存の対話型授業を改善するための理論的貢献を行う。

4. 研究成果

研究期間中、國分功一郎『中動態の世界』(医学書院)が刊行され、「中動態」への注目が集まった。本研究においても、「中動態」は私たちの研究をさらに発展させるヒントとなるのではないかと考えた。「芸術活動」と「言語活動」を統合的に捉えうる概念だと考えたためである。そのため、私たちは、芸術活動と「中動態」を接続して論じた、森田亜紀『芸術の中動態』(萌書房)に着目し、また森田氏を研究会に招いて、「中動態」に関する知見を伺った。その結果、「言語活動」と「アート」を接続した研究を進めていくことで、「詩的な言葉」以外にも、多くの、新しい認識をひらく「言語活動」の手がかりが得られるのではないかという手がかりを得られ、研究期間終了までに、研究メンバーがこうしたテーマでそれぞれ論文を執筆し、『言葉とアートをつなぐ教育思想』(晃洋書房、2019年4月に刊行)にまとめることになった。実際の「授業づくり」というレベルには、残念ながら到達できなかったが、その一方で、研究代表者以外、従来学校現場に関わることのほとんどなかったメンバーが、学校現場の問題に深く関わった論文を執筆、あるいは学会発表を行った。以下に示すように、倫理学が専門の勢力尚雅が、道徳教育、哲学対話に関する問題を論じ、教育哲学が専門で、従来学校現場に直接的に関与する研究者ではない山名淳が、広島基町高校をフィールドとして、「原爆の絵」プロジェクトに関係する人びとへのインタビュー調査をもとにした論文を執筆した。シュタイナーの教育思想を専門としてきた柴山英樹は、パウハウスの教師であった画家・パウル・クレーが、教師として、言語化しがたい「アート」をいかに言語化して生徒に語ろうと苦闘したかという問題を論じた。研究代表者の渡辺は、「詩的な言葉」に関する理論的問題を整理し、映画をケースとして、具体的な「詩的な言葉」の思考法が実現したとおぼしき場面をとりあげて考察するなどした。また、紀要に発表した論文では、AI時代における人間の言葉の学びの問題を、aiboとPepperの比較などを足がかりとして論じた。多様な領域の研究者による協働で、それぞれが従来立ち入ったことのない、学校現場の問題を論じたことにより、従来の研究にはない知見がもたらされ、大きな意義をもつものとなった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計10件)

渡辺 哲男、人工知能・ロボットと教育をめぐる思想：aibo・言語・ふるまいをてがかりとして、立教大学教育学科研究年報、62号、2019、113-132、査読無 DOI: 10.14992/00017617

柴山 英樹、プログラミング的思考と授業の方法に関する一考察：小学校段階におけるプログラミング教育導入をめぐる動向に着目して、日本大学理工学部一般教育教室 教職研究・実践紀要、2号、2019、31-43、査読無

小野 文生、山名 淳、矢野 智司、岡部 美香、平田 仁胤、生澤 繁樹、教育哲学は 災害と 厄災の記憶 にいかに向き合うのか 『災害と厄災の記憶を伝える』が提起しえたこと / しえなかつたこと、教育哲学研究、117号、2018、98-104、査読無

柴山 英樹、ICT を活用した授業における課題とデジタル教材の活用に関する一考察：『デジタル教科書』の導入をめぐる議論に着目して、日本大学理工学部一般教育教室 教職研究・実践紀要、1号、2018、36-45、査読無

Yamana, J., Hiroshima als architektonischer Raum der Erinnerung: Zur Problematik der Padagogisierung eines geschichtlichen Ortes., Jahrbuch für Historische Bildungsforschung, 22, 2017, 61-79, 査読無

勢力 尚雅、技術者倫理に関する倫理的考察、まてりあ（日本金属学会会報）、56 巻 4 号、2017、279-282、査読無

渡辺 哲男、実験的思考を導くための「詩的な言葉」によるダイアローグの可能性、立教大学教育学科研究年報、60 号、2017、87-104、査読無

勢力 尚雅、山田顕義の「人間の条件」日本大学の建学の精神のかたちと変遷をたずねて：学祖と建学の精神に関する研修を通じて感じ考えたこと、女性と文化 下田歌子研究所年報、3 号、2017、26-36、査読無

今井 康雄、渡辺 哲男、柴山 英樹、小松 佳代子、眞壁 宏幹、教育活動における言葉とモノ、教育哲学研究、113 号、2016 年、146-152、査読無

柴山 英樹、シュタイナーの系統発生史と「教育」の関係：「個体」と「想像力」のあり方に着目して、近代教育フォーラム、25 号、2016、62-69、査読有

〔学会発表〕(計 12 件)

勢力 尚雅、啓蒙とイロニーのゆくえ：ヒューム・橋川文三・吉本隆明の視座と語りを題材として、科研費主催講演会、2019

渡辺 哲男、山名 淳、柴山 英樹、言葉とアートをつなぐ教育思想：「詩的な言葉」「想像力」「記憶」を手がかりとして、教育哲学会第 61 回大会ラウンドテーブル、2018

勢力 尚雅、「道徳」と「公共」の目標・指導法・評価・連携をめぐる 6 つの問い、日本倫理学会第 69 回大会ワークショップ、2018

Yamana, J., Memory Studies and Teacher Education: Hiroshima City as an Architectural Space of Memory and its Pedagogization, International Conference: Teacher Education in (Trans)Formation: Global Trends, National Processes and Local Factors (招待講演) 2018

眞壁 宏幹、渡辺 哲男、田中 潤一、山本 正身、近代仏教と教育をめぐる学説史的研究・序説、教育思想史学会第 28 回大会コロキウム、2018

渡辺 哲男、土屋 陽介、関 康平、秋保 恵子、哲学対話と国語教育：「問いを立てる」授業の学校現場へのインパクト、全国大学国語教育学会第 134 回大会ラウンドテーブル、2018

渡辺 哲男、『君の名は。』において、なぜ三葉の 破局の警告 は父親に通じたのか？：コミュニケーションを起ち上げるための国語教育の可能性、全国大学国語教育学会第 133 回大会、2017

山名 淳、広島のアングラス：哲学者の隠れた文化的記憶論と<不安の子ども>、公開研究会「災害と厄災の記憶は伝えられるか：教育学と哲学の間で考える」、2017

勢力 尚雅、対話・学習する組織と制度変化：「規制」にどう向きあうべきか、日本機械学会 講習会「環境規制の実質化と次世代パワートレイン技術」(招待講演) 2017

渡辺 哲男、渡部 裕太、安尾 太一、秋保 恵子、作品の時代背景の 文化 に着目した国語科教材研究：若手の日本文学研究者によるケーススタディ、全国大学国語教育学会第 131 回大会ラウンドテーブル、2016

森田 伸子、渡辺 哲男、森田 尚人、山田 真由美、小谷 由美、桑嶋 晋平、藤原 敬、戦後教育学を哲学する、教育哲学会第 59 回大会ラウンドテーブル、2016

渡辺 哲男、「単元を貫く言語活動」を支える詩的なダイアローグ：「感じ直す」「考え直す」実験的思考のために、全国大学国語教育学会第 130 回大会、2016

〔図書〕(計 4 件)

渡辺 哲男、山名 淳、勢力 尚雅、柴山 英樹、森田 亜紀、田中 久文、言葉とアートをつなぐ教育思想、晃洋書房、2019、200

古橋 和夫、矢萩 恭子、寺田 博行、夏秋 英房、西 智子、塚本 美知子、森田 司郎、野上 遊夏、細戸 一佳、吉田 佐治子、柴山 英樹、田口 康明、中村 裕・大沢 裕、<新訂>教職入門：未来の教師に向けて、萌文書院、2018、256

小笠原 喜康、朝倉 徹、柴山 英樹、前田 善仁、渡辺 哲男、臼杵 龍児、哲学する道徳：現実社会を捉え直す授業づくりの新提案、東海大学出版部、2017、240

山名 淳、矢野 智司、小野 文生、田端 健人、阪本 真由美、岡部 美香、池田 華子、諏訪 清二、井谷 信彦、ローター・ヴィガー、災害と厄災の記憶を伝える：教育学は何ができるのか、勁草書房、2017、331

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：山名 淳

ローマ字氏名：(YAMANA jun)

所属研究機関名：東京大学

部局名：教育学研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：80240050

研究分担者氏名：勢力 尚雅

ローマ字氏名：(SEIRIKI nobumasa)

所属研究機関名：日本大学

部局名：理工学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：80459859

研究分担者氏名：柴山 英樹

ローマ字氏名：(SHIBAYAMA hideki)

所属研究機関名：日本大学

部局名：理工学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：60439007

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。